

学術展示 6

白内障：診断・計測

cataract:diagnosis/measurement

オンデマンド配信

学術展示 6-5

複数の機器で測定した角膜形状正常眼と異常眼の角膜乱視の比較

長谷川 優実¹、森 洋齊²、後藤 聡^{3,4}、鳥居 秀成⁵、
神谷 和孝⁶、柴 琢也⁷、小島 隆司⁸、宮田 和典²、
大鹿 哲郎¹

1:筑波大、2:宮田眼科病院、3:東京医療センター、4:カリフォルニア大・パークレー、5:慶應大、6:北里大、7:六本木柴眼科、8:名古屋アイクリニック

【目的】角膜形状正常眼と異常眼の角膜乱視を複数の機器で測定し、推定術後乱視量を比較すること。

【対象と方法】白内障手術を行った 129 例 192 眼 (70.2 ± 11.2 歳) で後ろ向きに検討した。角膜疾患を有する症例、および CASIA (トーマー) のフーリエ解析による非対称成分または高次不正乱視が 2SD 以上である症例を角膜形状異常群と定義し、それ以外を正常群とした。(1) オートケラトメータの K 値 + Barrett Toric 式, (2) IOL マスター 700 (ツァイス) の total keratometry (TK) 値 + Barrett TK Toric 式, (3) CASIA の real power + Holladay 式により、3 種の推奨トーリック IOL モデルと軸を算出した。実際の挿入モデルと軸、術後自覚乱視量と軸からそれぞれの推定術後乱視量をベクトル解析で求め、3 群間で比較した。

【結果】正常群 111 眼、異常群 81 眼であった。正常群の推定術後乱視量絶対値は、K 値が 0.52 ± 0.52D, TK 値が 0.57 ± 0.46D, real power が 0.61 ± 0.50D で、3 群間に有意差はなかった (p = 0.110)。異常群では、K 値が 0.92 ± 0.73D, TK 値が 0.91 ± 0.76D, real power が 0.78 ± 0.62D で、real power が小さい傾向にあったが 3 群間に有意差はなかった (p = 0.374)。

【結論】不正乱視の有無に関わらず、推定術後乱視量は測定機器による差がなかった。

【利益相反公表基準】該当有

【倫理審査】承認有 【IC】取得有